



# 新潟・出雲崎

写真 中塚 裕 文 西澤 健二

# 海が見続けた光と影

芭蕉を招き、良寛を生んだ町

「にいがた景勝百選」1位の「良寛と夕日の丘公園」から日本海と佐渡島を望む。眼下に見えるのが良寛堂と「妻入り」の街並み



間口が狭く奥行きが長い「妻入り」の街並みは、旧北国街道の小高い丘と日本海に挟まれたわずかな平場に約4km続く



良寛の生家、名主橋屋の屋敷跡に建つ良寛堂。今年は生誕250年、年に一度の法要の日に御堂の扉が開かれる



罪人を獄門に処した跡地に建つ地藏堂。赤頭巾を被った小さなお地藏さんが並んでいる



芭蕉園。俳聖・松尾芭蕉真筆の「銀河の序」の碑と芭蕉像が建っている。近くに芭蕉が泊まった大崎屋敷がある



道の駅「越後出雲崎天領の里」にある全長102mの「夕風橋」は、日本海に沈む夕日を見る絶好の観光スポットだ

まっすぐに延びる海岸線を波が洗う。その響きを子守歌のように聞く出雲崎の街。

およそ5500人が暮らす今の姿から江戸時代のにぎわいを想像するのは難しい。だが、ここは確かに越後随一の繁栄を誇る港町だった。佐渡島の金山が目前にあったのだ。

幕府は出雲崎を前線基地として、当時、世界の産出量を誇った金銀を陸揚げした。代官所が置かれ、金銀の管理と輸送が行われ、旅籠が軒を連ね、遊郭もできた。無宿人や下級船乗りの宿もできた。刑場もつくられた。最盛時は2万人が暮らしたという。

「奥の細道」を歩く松尾芭蕉が到着したのは元禄2（1689）年7月4日のこと。

目にとまったのは、やはり沖の佐渡島だった。

「この島はこがね多く出て（中略）限りなき目出たき島にて侍るを、大罪朝敵のたくひ遠流せらるる（中略）、日既に海に沈んで、月ほのくらく、銀河半天にかかりて（中略）そぞろにかなしびきたれば（以下略）」

荒海や 佐渡によこたふ  
天河」

そのおよそ70年後、良寛が生まれた。彼もまた出雲崎の虚栄と喧噪のなかで育ったが、旅人でも歌人でもない青年は、一句したためて立ち去るわけにはいかない。名主の長男という地位を捨て、18歳で出家した。二所不住の20年にわたる修行の後、この街に舞い戻る。それから托鉢をし、書に親しみ、子供たちと戯れながら飄然と生きた。

なぜ、出家したのか。何を思っていたのか。その理由は語られていない。

芭蕉の慟哭の詩情も、良寛の内なる思いも、そのすべてを包み込んで、出雲崎の街は静かに眠る。